

## 近所のシカヤマさんを偲んで

### 最近お気に入りの一枚

ドアホンが鳴って玄関に出てみると、近所のシカヤマさんが立っていて、「日曜にロンドンに帰るので、ケーキとお茶でもしませんか」と誘ってくださいました。

わが家から 10 メートルほどのところにご実家があるのだが、私より 4 歳年上のシカヤマさんとは幼馴染という実感がない。ひょっとしたら高校生くらいの時に引っ越してきたのかもしれないとのおぼろげな記憶も残っている。

卒業後単身イギリスに渡って旅行代理店に勤め、ご自身の事務所も持たれて、以来日本人の奥様とロンドンに居を構えて市民権もとつておられるそうです。

私は退職後のボオーッと暮らす日常のルーティンの一つとして、朝近くの公園に行って我流の体操を 20 分ほどこなし、そのあとタオルを首に巻いてウォーキングをするのですが、その途中によくジムでトレーニングを済ませて帰ってくるシカヤマさんと出くわし、気軽に話を交わすようになりました。

スマホやアイパッドを軽快に使いこなします。先日もカメラを軒下に取り付けていたので、「安全対策ですか」と聞く私に、「それもあるんですが、インターネットを通して、いつでもロンドンから見ることができるようにですよ」と、想像もつかない話に目を丸くしました。

一方の私はと言えば、何よりもスマホの通信料の高さに悲鳴を上げて、どうせ機能を使いこなせるわけがないとあきらめて、あたりまえにガラホを使用する始末。



店員の御嬢さんに撮ってもらった 70 歳と 66 歳の老人の写真です。 (2018 年 9 月 27 日)

### 高齢者二人で「お茶する！」

近所のシカヤマさんの玄関前に設えた小さな物干しに、洗濯物が風になびいて揺れているのをみると、「シカヤマさんがロンドンから帰って来たんだな」と知らされます。

朝、私が近くの公園で我流の体操をしていると、早朝のジムで汗を流して帰るシカヤマさんと出くわして、久しぶりの挨拶を交わします。

どちらからともなく「ゆっくり話しましょうか」と言葉が出て、「いいですね」とよどみなく話が進みます。そして、ここからが我ら高齢者の強みです、「いつにしましょうか？」と型通りの質問をすると、お互い顔を見合わせて「いつでもいいですよ」とまたたく間に約束が成立します。なにせ、時間はたっぷりあるのですから。

私はこんなお互いのちがいと距離感がとても心地よく感じて、日本に戻ってこられた時にはよく話すことになりました。長い年月を経て、シカヤマさんと出会い直したような気がしています。

この日も、歩いて 5 分ほどのココアルという瀟洒な喫茶店で、お互いの息子の愚痴を言いあい、映画の話や、日本の労働者があまりに働きすぎること、労働組合がもっと強くなる必要があること、病気との付き合い方、年金の話等々、ほとんど脈絡のないままにしゃべり続けました。

これまでわが家で夕食を共にしたり、梅田の居酒屋で酌み交わしたり、ちょっと豪勢な料亭のランチを食べたこともあったのですが、いつの間にかアルコールよりもスイーツを目の前に置いて「お茶をする」ようになりました。お互いのからだがそうさせているのかもしれません。

今回は「ニトリで小さなテーブル・セットを買ったので、ウチに来ませんか」と誘っていただきました。シカヤマさんはランチョンマットの上にロールケーキと、ロンドンの紅茶を用意してくださり、私はコーヒーを淹れて家の冷蔵庫に眠るメロンを切って持参しました。

二人のジジイが過ごす昼下がり、のんびりしたティー・タイムです。(2019年7月26日)



### 3 (トリプル) ジジイのティータイム

ツジノさん 84歳、シカヤマさん 74歳、松森 68歳、3人のジジイが集まって昼日中から夕日が沈むまでべちゃくちゃべちゃくちゃ喋りづめにしゃべり続けました。

ツジノさんは、わが家の向かいでメリヤスの家内工場を営む社長さん。むかしも昔その昔、私が小学生の頃にはツジノさんは立派な若社長で、当時「金の卵」といわれた中学卒業生を労働力として全国から受け入れ住み込みで雇っていました。隣近所だけでも数件、同じように「中卒生」を雇うメリヤス工場が数件あったのを覚えています。時あたかも高度経済成長まっしぐらの時代の話。

私は、その人たちをお兄ちゃんなど呼びながら、よく遊んでもらいました。道端でボール投げをしたり、かけっこしたり、休みの日には草野球のチームに入れてもらったり。給料日だったのでしょうか、近くのうどん屋さんで(私にとっては)豪華な(お兄ちゃんたちにとってもそうだったと思います)卵丼を食べさせてもらったこともあります。

その後、メリヤス・紡績関係の仕事が、大企業が安価な労働力を求めて中国、韓国、アジアの国々へと工場を移して行くのに伴って、またたく間に家内工場がなくなつて行き、私の周りからもお兄ちゃんたちの姿が消えて行きました。

ツジノさんも工場を閉鎖してやがて奥さんと二人で暮らすようになりました。温厚な人柄で、顔を合わせたびに丁寧な挨拶を交わすものの、ゆっくり話し合うということはありませんでした。



お二人が高齢となって大きな自宅を持て余すようになったのか、4月頃少し離れたマンションに引っ越しされたのですが、久しぶりにお顔がみたくなつて、声を掛けた次第です。たまたまロンドンから帰国されていた近所のシカヤマさんも加わって、午後の2時から3時間余り、持ち寄ったケーキやコーヒーを食べながら、

奥さんも交えて話し続けたという次第です。

話は自由自在に時間や空間を飛び越えて、子ども時代や近所の名物おじさん・おばさんの話、政治や経済、外交問題、最も盛り上がるのが 60 年前からいまにも続く、ご近所の噂話。いやあ、おもしろかった。夕食にも誘ってくださいり、話は途切れることなくたっぷりと夜のとばりが降りるまで続きました。

これまでほとんど交わることのなかった者同士が、引っ越しを機に生まれた「出会い直し」です。歳を食ったからこそできる技。人生すべてたものじゃないと、にんまりしながら、いま書いています。  
(2019 年 11 月 3 日)

### 続・トリプル・ジジイのティーパーティー

ロンドンに戻っていた近所のシカヤマさん（75 歳）が帰国したので、さっそく私（68 歳）がツジノさん（85 歳）のお家に電話して、シカヤマさんと二人で自転車を走らせました。お向かいさんだったツジノさんは、長年経営されていた紡績の家内工場をたたんだ後、ご夫婦で暮らしていたのですが、老齢の二人には広すぎて不便だと、半年ほど前に近くのマンションに転居されたばかり。

それまで挨拶は交わすものの、ゆっくり話すことなどなかつた 3 人がツジノさんの転居を機に家を訪問ししゃべりにしゃべったのがティーパーティーの始まりです。全くと言っていいほど交わることのなかつた人生を歩んだ 3 人が、「出会い直し」をするのですから、歳をとるとは如何にも不思議です。

持ち寄った菓子を真ん中に並べて、お茶やコーヒーをすすりながら話す話題は尽きません。ツジノさんの話を聞きながら、「この話前回聞いたんとちやうかな？」と、一瞬疑問が走りますが、「へえーー！」と驚いた声を上げてシカヤマさんが話を継いで語ります。「ほおーー！」とため息まじりに声を洩らしながら、私も負けじとしゃべり続けます。しゃべりながら「あれっ、これは前に話したかもしけへんな？」と、頭の片隅で考えながら不安がよぎります。

それでも 3 人とも目を輝かせて話を聞き合い、自分のことのように納得して、さらに語り続けます。しゃべれどもしやべれども話の尽きない面白さは、互いを丸ごと認め合う安心感と寛容さがもたらすものにちがいありません。年の功のなせる技というべきでしょうか。(2020 年 2 月 21 日)